

## ミャンマー情勢（四）

加藤淳平

もともとミャンマーは、英國の植民地化に對し、最も執拗に抵抗せる國なりと言ふべきか。西曆十九世紀初頭のこの國、今のラオスよりマラヤ半島、中國雲南の一部より、インドのマニプル及びアッサムに至る、廣大なる版圖を有する國なりき。西よりインド全土を征服し、更に東進せる英國、ミャンマーと衝突し、三次の英緬（ミャンマー）戦争を経て、一八八六年にこの國を植民地とせり。

英に果敢に抵抗し、敗北せるミャンマーの王族ら、敗戦後英軍人らより、非道なる待遇を受けたると覺し。されどその事實、今のインターネットにては知り難し、今のインターネットには、英軍に降伏せる王と王妃及び王女、後にインド、ボンベイの南に建設せられたる宮殿に、平穩に餘生を過ごし、王女らはそれぞれ結婚せりと記す耳。

されど一時のインターネット等に散見せる情報に據らば、英緬戦争に於て、さして英に抵抗せざりし王は、王妃、王女らとともに、インドにて餘生を送りたるも、主として英軍と戦ひたる王太子は處刑、王太子妃は、英軍のインド人軍人に下賜せられ、他の王族は全員、男は殺害、女はスリランカ、コロンボの花街に賣られたりとぞ。

斯かる情報の今は知り難きは、英の、曾ての非道なる行動を、現在のインターネットより削除、或いは隠蔽し、無害、或いは自國に有利なる記述のみを、世に流通せしめたるに因らむ。斯く歴史を振ぢ曲げたるは、何も英に限らず、西歐州植民統治諸國の、等しく爲せるところなり。されどミャンマーに於ける英の行動、背後に特別の事情無きに非ず。

英國の植民地統治、「間接統治」を標榜し、自國の統治のために、土地の統治機構を利用するが常なれど、ミャンマーにては、土地の統治機構、即ち王室を自ら破壊したれば、統治に利用し得べき機構無く、英の統治は、印僑・華僑らの外國人と、カレン族等のキリスト教徒少數民族、及びビルマ族の、西歐的大學教育を受けたる少數者に依存せり。

日本軍の進攻により、外國人らの國を離れ、獨立せるミャンマーの、國の統治を擔ひたるは、少數のビルマ族文官政治家とともに、アウンサン以下の、日本軍の育成せる國軍なりき。日本の戦争に敗北し、舊植民國英の復歸して、再植民地化を圖るに及び、日本軍と協力せる國軍、獨立運動を主導せり。

この國への復歸を狙ふ英等の歐米諸國、曾て日本と協力せる、愛國の念強き國軍を忌避す。獨立運動には妥協しつつも、スーチーを利用して、「民主主義」の旗印を掲ぐ。されどスーチー、徐々に歐米に利用せらるるを嫌ふに至れるか。然れども歐米人の植ゑ著けたる、ミャンマー人及び國軍への違和感は、依然として拂拭し得ざるが如く、この度は、中國共産党の働きかけに誑かせられ、自國を中國に、接近せしめんとす。

今般ミャンマー國軍のスーチーを拘束せる、興味深き難問を、歐米人等に投げ掛く。國軍を批難せんか、そはミャンマーの中國接近を容認し、支持するなり。歐米人等、この國の中國接

近を喜ばず、ミャンマーの自立を支持するや。然らば須らく、汝らが偽善的旗印なる「民主主義」の虚像を、掲ぐるを終りとし、眞の國益、奈邊にありやを自覺すべし。

我らが日本に、一切の疑念も逡巡もある可からず。唯ミャンマー國軍の、一貫して國の自立を、求むる行動を評価し、支持・支援する耳。然り而して歐米の、事あらば非歐米諸國の内政に、無責任に口先介入せんとする、時代錯誤の差別主義者ら、今難問に逢著し、右せんか左せんか迷ふを、「高みの見物」せばよからむ。快哉。快哉。

(令和三年九月二十七日受附)